



兵庫県立考古博物館秋季特別展「駅家発掘！：播磨から見た古代日本の交通史」を見学して（＜時評・書評・展示評＞）

三好，啓介

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 16:69-72

(Issue Date)

2024-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100499191>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100499191>



時評・書評・展示評

Current Topics & Reviews

兵庫県立考古博物館秋季特別展
「駅家発掘！―播磨から見た古
代日本の交通史―」を見学して

三好 啓介

はじめに

本稿は令和五年度兵庫県立考古博物館秋季特別展「駅家発掘！―播磨から見た古代日本の交通史―」の展示評である。本展覧会は同館一階の特別展示室において、二〇二三年九月三〇日から十二月三日にかけて開催された。当館が平成十九年度より継続している「兵庫県内における古代官道に関する調査研究」の成果をもとにした展示が行われており、播磨の事例を中心に古代日本の交通の実態に迫るものである。

以下、本展覧会の概要を紹介しつつ、評者の抱いた感想等を述べていきたい。なお、以下で展示資料について言及する

際、出典等は特に注記しないこととする。本展覧会の出品目録を適宜ご参照願いたい。

一 展覧会の概要

本展覧会は四つの章で構成され、古代山陽道に設置された駅家について、各地の調査成果をもとに紹介している。

まず第一章「律令制下の交通体制」では、古代日本の交通全体を概観している。山陽道の始点である平城宮跡の出土品をはじめとして、大宰府政庁跡や鴻臚館跡の出土品が展示されることで、山陽道・駅家という展示テーマを古代の交通体制という巨視的な視点から見ることができる。また、荷札木



令和5年度秋季特別展
「駅家発掘！―播磨から見た古代日本の交通史―」

会期 2023年9月30日(土)
～12月3日(日)

会場 兵庫県立考古博物館

簡や播磨国の調邸を示唆する出土品からは、古代山陽道を介した人や物の動きが描き出される。

では、第一章で見られたような古代の交通体制のなかで、山陽道に見える特徴は何であったのか。山陽道は古代の官道である七道のなかでも唯一「大路」に区分された。第二章「唯一の大路「山陽道」」では、小犬丸遺跡・落地遺跡を中心として、山陽道における駅家の実態を紹介する。小犬丸遺跡からは「駅」や「布勢」という文字が書かれた土器が出土しており、これらは文献に見える布勢駅家の存在を示している。また、野磨駅家と推定される落地遺跡は、駅家の具体的な構造を示す非常に遺構の状態が良い遺跡であり、この二つの遺跡は駅家研究全体の基礎となっている。両遺跡の調査により、山陽道の駅家は瓦葺き・白壁・朱塗りの柱をもつものであったことが判明した。本章では、これらの特徴を示す赤い塗料が付着したものや白壁の断片等が展示され、駅家の構造の実態を紹介している。

このような特徴をもつ山陽道の駅家であるが、播磨国内の山陽道沿いには先述の二つの遺跡を含め、九ヶ所の駅家推定地が発見されている。第三章「山陽道の駅家を掘る」では、当館に最も近い古大内遺跡を中心として、播磨国内の駅家推

定地の調査成果をもとに各地の駅家の実態を紹介する。ここでは、本展覧会の出品目録の表紙やチラシで取り上げられた、古大内遺跡（賀古駅家推定地）・辻ヶ内遺跡（高田駅家推定地）から出土した「播磨国府系瓦」が展示されている。加えて、「播磨国府系瓦」も紹介されており、駅家が国ごとに設置・管理されていたことが垣間見える。

以上のように、山陽道諸国で設置・管理された駅家であるが、各地域においてどのように機能していたのか。第四章「山陽道往還」では、歴史上よく知られる人物との関わりが見える山陽道諸国の駅家をいくつか紹介する。本章の展示品で特に注目されるのは、吉備真備の祖母の遺骨を納めた「下道圀勝圀依母夫人骨蔵器」である。これと同じ場所で別の骨蔵器が出土しており、現岡山県小田郡矢掛町の地域一帯に下道氏が勢力を有していたことがわかる。また、本資料の銘文には「圀」の字が見え、これは下道氏が中国の動向に敏感であったことを示すという。本章では、この展示品を同地域に存在する小田駅家に推定される毎戸遺跡と関連付けて紹介する。

二 展示評

ここまで、本展覧会の章構成とその概要を記した。以下では、評者の感想や考えたことについて述べたい。

まず、本展覧会を見学して抱いた感想を挙げていきたい。その一つ目として、展示構成が明瞭であったことが挙げられる。まずは第一章で交通制度全体という視点から山陽道の駅家を捉え、第二・三章で播磨国の駅家を詳細に見ていく。そして、これらを踏まえた上で、山陽道諸国の駅家を紹介する。本展覧会では、テーマである駅家を古代日本・播磨国・山陽道諸国といった三つの視点から見えており、それらが観者にわかりやすい構成となっている。

二つ目に、パネルやキャプションが非常に充実していたことが挙げられる。日本全体・西部・兵庫県下という三つの視点から駅家の分布が示されたパネルが展示室入り口に設置され、先述の三つの視点とリンクしており、展覧会の全体像を抑えた上で展示を見ることができた。そして奥に進むと、第二・三章で取り上げた遺跡を一望できる航空写真が壁一面を用いて設置されている。これにより、播磨国内の駅家の分布

だけでなく、古代山陽道が直線的であること・駅家がおよそ等間隔で配置されていること・駅家周辺の地勢などの様々なことを視覚的に理解することができた。キャプションについても、展示品に関する情報が簡潔かつ十分に記述されており、理解を深めることができた。駅家をテーマとする以上、遺構から見える駅家の構造等の提示が観者に求められるところである。しかし、構造そのものを展示することのできる遺物そのものは無いため困難を伴う。ただし、本展覧会では、キャプションのなかで遺構の写真や遺跡の航空写真を多く取り入れつつ説明がなされることで、上記の課題を解決していた。これにより、駅家の全体像がより鮮明に提示されていたことが評価される。

次に、本展覧会を通して評者が考えたことをいくつか述べたい。

本展覧会の第二・三章においては、播磨国内の駅家を集中的かつ詳細に見ることが一つの主題であったと思う。小犬丸遺跡や落地遺跡のように駅家研究を大きく進展させた遺跡が存在する播磨国において、個々の駅家の検討することは非常に重要である。そこで、これらの個々の駅家は、他の駅家とどのような関係をもったのだろうか。国のもとで等間隔に配

置され、管理された駅家は、何らかの有機的な繋がりをもっていたのではないかと考える。また、駅家同士の関係が想定される一方で、駅家とそれが所在する地域との関係も気になった。特に、第四章で小田駅家が所在する地域には下道氏の有力氏族が駅家ひいては地域の交通にどのように関与していたのか、駅家は地域のなかでどのように機能していたのか。本展覧会の主旨から逸れる部分もあるが、知りたいところであつた。

また、本展覧会はその名の通り、播磨から日本古代の交通史を見るというものであつた。ただ、そのなかで播磨国内の遺跡の調査成果より見えた駅家の実態が、「播磨国の駅家」として位置付けられるのか、または「山陽道の駅家」として位置付けられるのかについて、少しわかりにくい部分があつた。もちろん、この二つには単純な二項対立ではなく、重層的に捉えられる要素があると思われる。様々な制約があることを承知した上で、評者のわがままを述べると、山陽道諸国の駅家との比較のなかで「播磨国の駅家」としての側面が、そして、他の古代官道との比較のなかで「山陽道の駅家」としての側面がより明確に示されると良いように感じた。

おわりに

以上、本稿では「駅家発掘！——播磨から見えた古代日本の交通史——」の概要と、見学した感想等を述べた。拙い評であり、誤解もあらうかと思うが、どうか御寛恕願いたい。本展覧会は、展示室のあらゆるところに情報が詰まっており、学ぶところが多くあつた。また、古代日本の交通における駅家について考える機会となつた。本展示を企画された皆様に感謝したい。

冒頭で触れた「兵庫県内における古代官道に関する調査研究」は、兵庫県立考古博物館の開館より行われ、十六年の研究の積み重ねがある。本展覧会の開催は、その成果を多くの人々が知る機会となつたであろう。本展覧会を経て、山陽道の駅家をはじめとした古代官道をめぐる調査研究がさらに進展することを期待し、本稿を擲筆する。